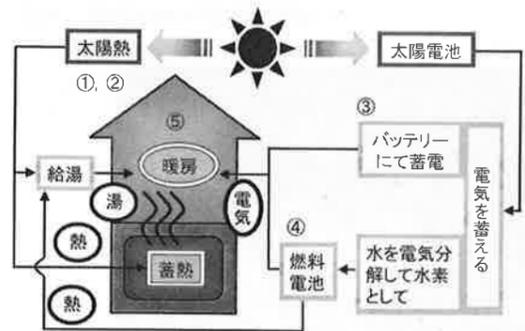


シリーズ隠れた建築紹介 ～エネルギー自立型住宅～

20世紀には、石油などの化石燃料や核燃料をエネルギー源として産業が発展し、我々の生活も豊かになってきたが、その反面、炭酸ガスの増加に伴う地球気候の温暖化や産業廃棄物や放射性廃棄物による環境汚染が顕在化し、人類に悪影響を及ぼす可能性が高まりつつある。21世紀に向けては、地球の熱収支に影響を与えない太陽エネルギーの有効利用が早急に求められよう。

信州は、例えば長野、松本地区の1月平均気温が-1.0℃という寒冷地であるにも関わらず比較的日射量が多く、太陽エネルギー利用の観点からは有利な地域である。信州の住宅はほとんどが夏向きに造られているため、冬期の暖の取り方もこたつ中心の局所的なものが多いが、最近では熱損失の少ない断熱気密住宅が北海道から普及し始め、住宅全体を暖める環境の良さが信州にも認識されつつある。しかしながら、住宅のシェルターとしての性能を高めても暖房費が予想以上に増えるケースが見られ、住宅の暖冷房エネルギー消費に対する関心が高まっている。

そこで、平成10年秋に、信州大学工学部の教官10数名が学科の枠を越えて集まり「エネルギー自立型環境調和住宅研究会」を発足させた。この研究会では長野地域において太陽エネルギーを有効に活用しエネルギー自立型住宅システムの確立を目指す。新たなシステムの構築を意図するのではなく、現在手元にある個々のシステムを組み合わせることでエネルギーの自立を実証することを目標としている。主なコンセプトは、住宅のシェルター性能である断熱気密性能を確保した上で、さらにエネルギー消費量を削減させるために、①高効率太陽集熱器を利用する。②過集熱を解消させる臭素リチウム小型吸収冷熱放熱器を開発し、温冷水を介する冷暖房システムを導入する。③太陽電池により発電された電力を過充放電制御した鉛蓄電池に蓄える蓄電システムを開発し、主として照明、冷蔵庫、家電製品などに供給する。④住宅用の小型燃料電池の実用化に向けた開発を行う。⑤これらのシステムを実際のモニター住宅に不加しその効果を評価する。などである。モニター住宅を対象とした実験を行うにあたり、平成11年度より準備を開始するが、エネルギー自立を目指した“隠れた建築”が信州地域の発展基盤として貢献することを期待する。 —信州大学工学部 山下恭弘



北陸支部インフォメーション



■新潟支所長就任挨拶

川瀬清孝先生の後を受けて新潟支所長になった樋口忠彦(55歳)です。新潟大学で都市計画と景観計画の教育研究に携わっています。

新潟では、長岡造形大学と新潟工科大学に建築系の学科ができて、いまや卒業生を世に送り出すようになりました。建築に関わる人が

増えてきましたので、支所の活動を今まで以上に活性化できるのではないかと考えています。

—新潟支所長 樋口忠彦

■北陸支部大会

日時・内容：7月30日(金) 研究発表会、集中討議、支部奨励研究成果発表、作品発表、表彰式、懇親会
31日(土) シンポジウム、見学会

会場：富山県民会館

■講演会

(1) 支部総会付随行事

日時：5月24日(月) 14時20分～15時50分

演題：環境デザインの方法

講師：仙田 満(東京工業大学教授・本会副会長)

会場：新潟厚生年金会館

(2) 支部訪問記念講演会

日時：6月30日(水) 15時～16時30分

演題：建築および都市の防災性向上に関する提言

—阪神・淡路大震災に鑑みて

(日本建築学会第三次提言) —

講師：岡田恒男(芝浦工業大学教授・本会会長)

会場：ホリディ・イン金沢

参加費：無料

定員：100名

(3) 1999年 日本建築学会賞(作品部門) 受賞者記念講演会

日時：7月13日(火) 18:00～20:30

テーマ：「作品を語る」

講師：山本長水(山本長水建築事務所所長)

横河 健(横河設計工房代表取締役)

会場：未定

定員：300名(当日先着順・入場無料)

■展示会

(1) 1998年度 支部共通事業設計競技全国入選作品展

5月24日(月) 新潟厚生年金会館

(2) 支部共通全国大学・高専卒業設計展

新潟(新潟大学) …10月13日(水)～15日(金)

石川(金沢工業大学) …12月1日(水)～3日(金)

福井(福井県立美術館) …12月9日(水)～12日(日)

長野(信州大学) …6月22日(火)～24日(木)

日本建築学会北陸支部ニュース「AH!」第16号

発行日 1999年5月20日発行

発行 日本建築学会北陸支部広報部会

相田 幸一(新潟) 加藤 則子(富山)

長谷川兼一(長野) 池本 敏和(石川)

野嶋 慎二(福井) 石川浩一郎(福井)

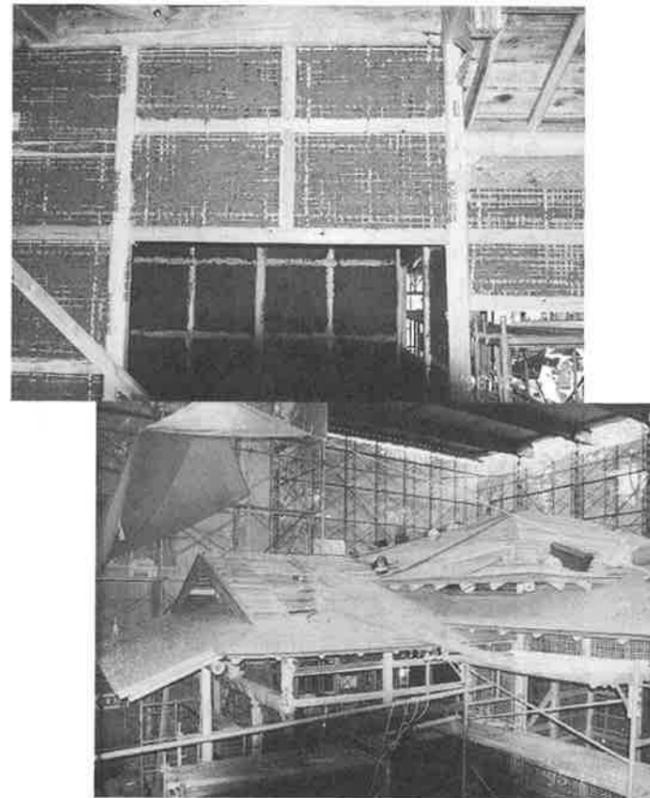
事務局 室田 文男・瀬口さゆり

〒920 金沢市玉川町15-1、パークサイドビル3F

TEL&FAX 076-220-5566

特集

地域、伝統、風習



時雨亭 (兼六園)



支部ニュース「AH!」の第16号をお届けいたします。福井大学の桜井先生が、部会長として、創刊号から年3回の発行を5年間継続され、第15号まで発行するに至りました。これまでのご尽力に対しまして敬意を表したいと存じます。

さて、本号から石川が部会長として本部会のお世話をさせて頂くことになりました。新しいテーマは、「地域、伝統、風習」をキーワードとして5つの支所で座談会を催し、多様な地域、伝統、風習のもとで生まれ育った人々の談話から、我々の知らなかったこと、または、驚かされる話がでてくるものと期待しています。最近、いろいろなことで変革を求められるようになってきましたが、古き良き伝統、風習を守る英知と新たなことへ踏み出すときの判断力をもてたらと思っています。さしあたっては、いろいろな情報メディアの利用により広範囲な北陸支部会員皆さんの交流の場を提供したいと計画しています。

金沢の伝統と建物

北陸には古い伝統文化が、今も息づいています。今回は、「金沢の伝統と建物」というテーマで座談会を開催しました。出席していただいた方々は、木に加賀友禪を絵付けする新しい技法を開発して石川ブランドを受賞した友禪作家久恒俊治さん、長年お茶に親しんでいらっしゃる井原朋美さん、寺社建築を専門として現在兼六園茶室(時雨亭)の復元を手がけている松浦建設の松浦弥さん、在来工法にこだわり木造和風住宅の設計をされている玉家建設の北村浩一さん(現在、あさひ木材へ出向)の4名です。司会は金沢学院短期大学生活文化学科助教・馬場先恵子先生にお願いいたしました。

伝統と伝承

司会：加賀友禪は全国的に有名な金沢の伝統工芸ですが、加賀友禪と京友禪はどこが違うのでしょうか。
久恒：友禪は宮崎友禪齋という人が加賀で開発し、その後京都に出て広め、晩年はこちらにもどって来たといわれています。ですから、京友禪も、加賀友禪も、技法は全く同じです。ただ、その後の発達が違うようです。京都は金銀の刺繍を施しているものが多いのですが、加賀は染めだけです。京友禪には刺繍、染めすべがありますが、その分的が絞りがきれいな。一般の人にとっては何が京友禪かということが分かりにくいようですね。加賀は工場生産は行わず、全くの手作業で行ってきたのに対し、バブル時代に他の地域の友禪は大量生産に走った。加賀は時代遅れだと言われながら、かたくなに伝統を守ってきたわけです。
井原：加賀友禪はとても高級で、私は長い間お茶に親しんでいますが、普段着にはとても使えません。最近では洗える着物などがあって重宝していますが、加賀友禪は絹だけで新素材では無理なのでしょう。
久恒：技術的に、われわれが手で染められる範囲が決まっています。もち米の糊が浸透してくれないと色が出せません。変わった織物では色が出ない。それがポリエステルやテフロンとかになると、染料が違います。石川県では地場産業としてポリエステル精練が盛んですが、ポリエステル用の染料は分散染料といって、焼き物と同じで最初は全く違う色なのです。全然違う色がたとえば緑になる。調合したらどのような色になるか全くわからない。ほんのちょっとの微妙な色の違いが出せない。手で感覚的に調合できるような染料を使えるのは絹と木綿だけなのです。でも、コンピュータを使えばできます。微妙な色の調合をすることができます。コンピュータで友禪を染める。ある人がこれは伝統産業ではなく電腦産業と言っていました。これからはそういうことも必要になってくるのではないのでしょうか。私も実験的にコンピュータで加賀友禪を描いて、ブラウスに染めてみました。伝統的なもので

あっても、素材を変えたら素材にあったようなものに変えてもいいんじゃないかと思っています。宮崎友禪齋がヒットしたというのは、その時代では最高の技術だったからだと思います。その時代では細かい模様を布に描くというができなかった。それが、糊というものを開発して、細かい模様の日本画を描くことのできるようになった。それが、その時代の最高の技術だったわけです。今、コンピュータを使ったハイテク技術で新しい染め物をつくった場合、それが200年300年後には伝統になっているかもしれないわけです。

司会：伝統といっても、昔のものを守っていくだけが伝統だろうか、常々考えているのですが、今から伝統を作るとなればそういう考え方になってくるのではないのでしょうか。伝統芸能ということから話が進んでおりますが、茶道というのは昔ながらの伝統的なものであると思いますが、いかがでしょうか。
井原：お茶は、稽古事として堅苦しい作法と思われがちですが、お茶会を開いて、亭主が客をもてなし、主客相互の思いやりのうちに楽しく時を過ごそうというもの。その中で、「夏は涼しく、冬は暖かく」もてなそうという心遣いがなされてきたのです。お茶室は季節によって、随分とその様子が変わります。お茶というのは、とても季節感というものを大切に考えているからなんです。たとえば、暑い夏は、朝の涼しい間にお茶会を行い、道具の取り合わせにも十分に気を配ります。「葉蓋」といって、水差の蓋を木の葉にすることがあります。葉っぱに光る一滴の水が涼感を誘うのです。亭主は客に涼しく過ごしてもらうために、いろいろと工夫を凝らします。ところが、最近は建築様式が変わってきていて、どこへ行っても冷暖房完備で、亭主のせっかくの心遣いが感じ取れなくなってきたように思います。今日はとても寒いからと、精一杯の暖かなもてなしをしていても、待合からぬくぬくとしていては、その思いが伝わってこないのも無理はありません。お茶会の楽しみがわかるようになってきたら、余計にちょっと寂しい気がします。
司会：生活環境が変わってきているけれど、昔ながらの伝統を守ってきているのがお茶というもので、ギャップを感じるけれども、昔の生活を思い起こすチャンスにもなるのではないのでしょうか。お茶の方でも、新しい



久恒俊治さんの作品



久恒 俊治さん



井原 朋美さん



松浦 弥さん



北村 浩一さん

ものを取り入れているということはあるのでしょうか。
井原：そうですね。最近ではホテルにもお茶室がつくられていて、先日、あるホテルでのお茶会に招かれました。お茶室というのに、床の間がとても豪華でした。金箔が施されていたりして...。お茶室として使おうと思うと、それがとても邪魔になって、床の間に合う軸などを揃えるのがとても大変だったそうです。昔からの古いお茶室は、本当に飾り気がなく殺風景に思えるほどです。だけど、待合で最初に目にする控え目な軸と野の花が、これから始まるお茶会に、何かわくわくした期待感を持たせるのです。期待しながら、本席に入って、「あー、さっきのはこういう心遣いからだったんだ。」ということがわかるわけなんです。こんな楽しみがお茶の魅力ですね。昔を持ち続けたいという気持ちもありますが、生活が変わり、人の意識も変わってきているのだから、その中で古いものをずっと、これだけはしなければならぬというように、固執しなくても、とは思っています。道具の取り合わせを考える時、茶道具という固定観念だけからではなく、日常生活の中で使われているものを使ってみたり、遊びの心を取り入れて楽しんでいきたいと思っています。風炉先に、先ほど見せていただいた、木の友禪のようなものを使わせていただくと素敵ですね。
久恒：ぜひ、使ってみてください。伝統と伝承というのがあって、昔のものを守っていくが伝承だと思います。しかし、伝承するということが難しい。時代が変わって昔のものをずっと育てるとするのも難しいものです。昔のものを伝承しながら、新しい伝統を作っていくことが大切ではないでしょうか。

建物と伝統

司会：建築の分野でも昔ながらの伝統を継承している部分と、現代の生活に合わせている部分とがあると思うのですが、松浦さんは、特に伝統的な、寺社やお茶室を手がけていらっしゃるという伺いましたが、その点はいかがですか。
松浦：昔の大工さんは現場にカンナを研ぐ場所があって、大工さんはほとんどの時間カンナ削りの仕事をしていました。昭和30年ごろまで、そのようなやり方だったのですが、今では工場生産のプレカット方式になって、和室のない部屋ではそのままボードをはってクロスをはって、和室でもそれができるようになっていますよ

ね。ただ、茶室とかお寺とか神社に関していえば、いまだに昔の工法で建てています。ノミにしても、平たいノミだけではなく、彫刻刀の様なものを使う。茶室の場合は柱が丸く、大きさもばらばらなので、面戸という板を合わせて切る。それがたいへんなんですよ。もちろん、建て方やなげしのはり方は、伝統的な技法をそのまま使っています。そのためにお茶室は、質素なものでありながら、大変高くつくわけです。だいたい1坪300万円ぐらいです。床柱などは1本いくらの世界ではなくて、1ついくらという世界。何百万するものもあるわけです。いま、兼六園で茶室を作っておりまして、こんなことをやっているのだったら、お茶の心を知らなければならぬと、お茶会に参加してみたのですが、いろいろと勉強になりました。座り方から歩き方、茶わんをゆっくり見なさいとか、1輪ざしがあってこのお花はどんな気持ちでさされたものか、などを考えなさいといわれました。地鎮祭でも、縄のはり方があるそうです。神社の仕事をする以上、このぐらいいは知っておきなさいと、神主さんに説教されまして、勉強しました。神様は北の方に置いて南側から向けて、東北の角から回して、というように順番があるわけです。宗派によってはり方がいろいろ違うようです。

司会：茶の心や神の心を知って建築の仕事をしていらっしゃるというわけですね。北村さんは主に一般住宅の仕事を手がけていらっしゃるようですが、一般の住宅においてはいかがですか。
北村：プレカット方式は僕の入社した頃から始まったものです。それまでは大工さんが自宅や材木屋さんの仕事場でカットしていたのですが、今は工場です。その点では昔よりも便利になったのですが、機械の方が上手なところと人間の方が上手なところがあって、特に丸太になると機械では無理です。最近一般の家ではほとんど無く



1996.10 久安邸



馬場先恵子さん



久恒俊治さんの作品

なった泥壁などは、昔はそれしかなかったから、裏山から木を切って柱に使って、泥は裏山からとってきて使って建てた。よくこの床柱はうちの山からとったとか聞きますね。ほんの50年ぐらい前まではそんなところがあつたと思いますね。

松浦：特に金沢は、土間に赤土をひいて固めて使っていたのが特徴ですね。

久恒：染めもの屋さんの話を聞いていますと、赤土の土間がよいそうですね。染色の盛んなところは湿度が高い。ですから、京都や金沢が発達しているようです。東京も神田川などの風がちよっと吹いているところで染め物が行われています。ある程度、湿り気があつて日が当たらないところがいいのです。赤土は水分をすって湿度を保ってくれます。新しくなってコンクリートとなつていると、土間に水を打って仕事をしなければならぬ。日当たりがよい染色団地では、なるべく日が当たらないようにして、水を打ってじめじめとしたところで仕事をしています。

司会：久恒さんの仕事場はどうですか。

久恒：エアコンを使っていますが、筆で塗るので、広いところを塗ろうとすると乾燥するとむらになってしまいます。それで加湿器を使って湿度が60-70%になるようにしています。日が当たると色が変わってくるので、直接日差しが当たらない北向きの部屋を仕事場に、ひさしを長くとつてあります。

地域性を生かした住宅設計

司会：住宅の建て方で、地域性や最近の変化はありますか？今の設計では家主がほとんど間取りを決めているといわれますが・・・

北村：家主に間取りを作ってもらおうと、外観がつかれませんが、外観と間取りの関係が深いので、同時に考えられるようにしないとプランは作れない。家主に任せるとかえってクレームのもとになる場合があります。希望は聞けけれどこちらから提案して、設計するようにしています。

松浦：お客さん任せの設計をしない。こちらから提案する形に持ってける会社かどうかが、会社の善し悪しを決めるんじゃないかと思えます。

北村：最近の家を建て替えられる人は、家が古くなったからというよりも、生活スタイルが変わってきたとか、家族構成が変わったからという場合が多くなったですね。それで、将来の家族構成を考えて、内部は後でも変更できるような建て方をなさる人が増えていきますね。

司会：地域によって、家の建て方が違うと思うのですがその点はいかがですか。

北村：まちの家では工場生産の製材だけでよいのですが、能登の方に行くと丸太が一本もないと困るところがある。能登の方に出荷するのだから丸太を使うという様に地域色を考えて提案するようにしています。

松浦：もともと、住宅の設計は家で葬式をだせるようにという考え方でした。そのような設計をしていたので、仏間が広いわけです。最近、葬式を行える公民館や集落センターが増えていまして、だんだんそのような建て方が減ってきていますが、能登の方には、まだそういう地域性が残っています。どこの家に行っても、玄関があつて座敷があるという同じ形式です。金沢でも、和風、洋風に関わらず、必ず仏間と床の間がありますね。最近では、2間続きの和室を作られる方が、また増えているようです。

北村：北陸は住まいにお金をかけるようです。玄関を広くとり、ごてごて飾りたてるのではなく、さりげなく絵や花を飾ったり、伝統工芸品をおいたりして、そのへんが金沢の奥ゆかしさではないですか。

井原：金沢の人は奥ゆかしいとよく言われますね。お茶の世界でも、たとえば、このふくさのように、表はなんの変哲もないふくさなのですが、裏にこのように模様があつて、お点前中は普通は見えないのだけれど、ふくさを返したときにちらっと見えたりする。そういうのが、金沢の奥ゆかしさで、好きですね。北村さんのおっしゃる通り、金沢の家の玄関は広いですね。縁側を広く取っていたり、それに、中庭などにも趣が感じられますね。雪がちらちらと舞っている時に、雪見障子を上げ、一服のお茶を楽しむのは、本当に風情があります。一見無駄とも思われる所にも心を配り、ゆとりの空間を大切に作る心というのは、金沢の人の古くから根付いている気質ともいべきものなんではないかと。

司会：お話を伺っていて、いろいろなところにつながりがあつて、生活に影響を及ぼしていることがわかりました。金沢独自の伝統がそれぞれの世界で認識されているというのが私の一つの感想です。そういう伝統をいろいろな機会に外に発信することも非常に重要だと感じました。そういうことを、知ったうえで改めて自分の町を見ると、違うものが見えてくるような気がします。伝統を残していきたい、いいものを見る目を残していきたいという心が、金沢のこれからの伝統を作っていくのではないかと思います。本日は、ありがとうございました。

第3回ワクワクワークショップ全国交流会 | Nおおがた・建築チャンネルが開催されます

日頃建築設計やまちづくりに関係している人々にとっては『住民参加』や『ワークショップ』という言葉に耳にする機会が最近多いのではないのでしょうか。新潟県内でもここ数年参加型デザインの流れが定着しつつあります。この様な背景のなかで、第3回目になるワークショップ全国交流会を新潟で開催したいという声が上がリ、実行委員会が発足し、メイン会場になる大潟町の町民を中心に着々と準備が進められています。

私たちは、今回の全国交流会をこれまでの経緯を検証する機会ととらえています。もう一度基本的な考え方を再確認し、全国の方々がやっているワークショップの事例を素材にして、今何が必要とされているのか、また今後どのように展開すべきかを考えたいと思います。

全国交流会は5月21日(金)~23日(日)の3日間開催されます。この中では11の分科会(ここではチャンネルと呼びます)が予定され、その中の一つとして建築チャンネルが企画されています。ここではワークショップに関り優れた建築作品を生み出している建築家の芦原太郎氏をはじめ多数のゲストを迎え、全国の関係者の参加を求め、事例を分析し市民、行政、専門家(建築家)との関係性を明らかにしワークショップで何が可能で何が不可能なのか・・・可能性と限界を明らかにし、未来に向けた新しい関係づくりを提案したいと考えています。是非みなさんの参加をお待ちしています。

■プログラム(予定)

| 日 | 時間 | 内容 |
|----------|-------|--------------|
| 5/21 (金) | 10:00 | 受付開始 |
| | 13:00 | 開会 |
| | 16:00 | ワークショップ(分科会) |
| 5/22 (土) | 9:00 | 受付開始 |
| | 9:30 | 開会 |
| | 10:00 | ワークショップ(分科会) |
| 5/23 (日) | 9:30 | 受付開始 |
| | 10:00 | 開会 |
| | 10:30 | ワークショップ(分科会) |

性

問合わせ先
(建築チャンネル事務局):
上山寛アトリエ
TEL 025-228-0252
FAX 025-228-0085

私の中のガラス

もともとは木や粘土が好きだった。どちらも感触や形、臭いを確かめながら制作していくことができる素材だから。ところが・・・10年程前になる。ある講座のガラスという文字にふと目をとめた。それがこの工房の原点ともいえる。

最初におもしろいと思ったのはサンドブラストという技法だった。機械を使ってガラスの表面に砂を吹きつけることで彫刻ができるものだ。また、熱によってガラスが曲がったり溶着したりするのも新鮮だった。ガラスは固いもの、というイメージが変わり、まったく未知なる素材として強く惹かれた。が、



それは、冷めている状態でのガラスのこと。吹きガラスを始めてからは、また、イメージが変わってしまった。というより、ガラスが生き物であることに気がついた、と言ったほうがいいのかも。1200度の高温でドロドロに溶けたガラスは勝手に形を変え、私の意のままにはならなかった。熱く、赤く、美しいガラスにずっと悩まされた。どこをどう温め、どこを冷ますかなどを順序立てて進めていかなければ、決して思うような形にならないことを知った。

簡単なことのようにだが、ガラスの気持ちがわからなくて頭を抱えることもある。いまでも木や粘土の感触は私から切り離せないものだが、結局一番長く側にいるのはガラスになってしまった。この10年は闘いの日々のもあったし、気がつくたびにガラスに吸い寄せられている時もあった。自由に動いていたのに、冷めてしまえば壊れやすく、儂い存在に変わっていくガラス。だからこそ、優しく接していきたい。私の手の中でも、心の中でも。

—GLASS FACTORY K's studio
代表 吉田 薫



(富山美術工芸専門学校建築学科2年・佐藤由紀子)

「役所」と「住まいづくり」

県や市町村などの「役所」って何をしているところでしょう。住民票をもらったり、出生届を提出したりするところかな。そうそう、道路工事や下水道工事なんかも行っているわね。

どれも正解です。では、「役所」と「住まいづくり」って何か関係あるのでしょうか。どうかなあ。我が家だってお父さんが知り合いの大工さんに建ててもらっただけだし。あ、でも「県営住宅」って言うのがうちの近所にあるわね。最近建て替わって、とってもおしゃれになったわ。結婚したら私も入れるかしら。

確かに「県営住宅」は役所が行っている住まいづくりのひとつです。公営住宅法に基づき比較的安い家賃で、所得が低く困っている人に、住まいを提供しています。

石川県内には県営、市町村営合わせて約1万3千戸の公営住宅があります。世帯の平均人員が3人余ですから、約4万人の人が公営住宅に入居している計算になります。

もちろん、それだけではありません。石川県では、総合計画である「いしかわ・ゆとりある住まいとまちづくり計画—石川県第七期住宅建設五箇年計画—」に基づき、様々な施策を行っています。

例えばバリアフリー条例により、高齢者等にやさしい住まいづくりを推進すること、まちなみ整備事業や景観条例により、住みよい石川県らしいまちづくりを推進すること、住宅公社による質の高い持家住宅を提供すること、高齢者や耐震性に配慮した住宅を対象として建設費の一部を補助すること、在来工法による木造住宅の担い手を育成することなど、あらゆる方向から「役所」は「住まいづくり」に関係しています。そして、若年層から高齢者までライフステージに応じた多様な選択のできる住まいづくりができるように日々努力しています。

ところで、「居住水準」って言葉、聞いたことがありますか？五箇年計画に定められているこの言葉は、世帯構成に応じて必要とされる住宅規模や設備（風呂や便所など）等を定めたものです。居住水準はさらに3種類に分かれており、「最低居住水準」（全国一律）、「都市居住型誘導居住水準」（都市の中心部及びその周辺における共同住宅居住を想定したもの）が、（一般型誘導居住水準）（都市の郊外及び都市部以外の一般地域における戸建住宅を想定したもの）があります。参考として面積だけを表記しておきます。

| 世帯人員 | 住宅面積（㎡） | | |
|------|---------|-----|-----|
| | 最低 | 都市 | 一般 |
| 1人 | 18 | 37 | 50 |
| 2人 | 29 | 55 | 72 |
| 3人 | 39 | 75 | 98 |
| 4人 | 50 | 91 | 123 |
| 5人 | 56 | 104 | 141 |
| 6人 | 66 | 112 | 147 |

あなたの住まいは居住水準を満たしていますか？

—石川県土木部建築住宅課 三谷浩二郎



(新潟デザイン専門学校環境デザイン科3年・岩淵玲子)

故郷探訪—今庄板取宿



私の生まれ故郷は北陸トンネルの玄関口、今庄である。今庄とて古くは街道の宿場町であり、北陸トンネルが出来るまでは、保線区を持つ鉄道の町として一時代を築いた歴史がある。町内の通りにも歴史を感じさせる家並が残っている。また、国道365号線を南下すると、今庄365スキー場入口付近に「板取の宿」の案内板の通り、昔からの茅ぶきの民家が保存されている。

戦国時代までの越前への陸路は、山中峠を超える古道(万葉道)と、木の芽峠を超える北陸道(西近江路)だけであったが、柴田勝家が北の庄に封じられ、信長の居城安土に赴く最短路として、桁の木峠の大改修を行って以来、人馬の往来が頻繁になり、越前の南端の重要な関門の地として「板取の宿」を置き、北国街道(東近江路)の玄関口として、あるいは近江、越前両国を結ぶ要の宿として発達した。

江戸時代には関所が設けられ、旅人を取締まり、旅籠、問屋、茶屋、民家等五十三戸が建ち並んで賑わったと伝えられている。先述した通り、今も甲造り型、妻入り型という最近では余目にしなくなった茅ぶき屋根の民家4軒が町により保存され、内2軒は居住、1軒は資料館として、もう一軒は友会(本会員の高嶋秀夫氏主宰の建築同好会)として、我々の例会等の行事に利用、活用している。

今庄は、福井でも雪の多い事で知られている。特にこの板取地は今も積雪一メートルを超え、周囲はひっそりとした独特の風情を見せている。都会のような派手さ、賑やかさ等はまったくないが、田舎の素朴さがあり、のんびりとした心安らぐ地である。一度訪ねてみて下さい。

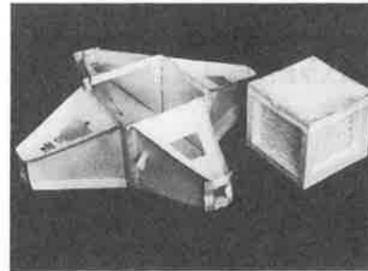
—前田建設工業株式会社 歌門啓二

和紙との出会い

部屋を暖める。冷やす。誰もが換気するとき「もったいない」と思う。おカネをかけて暖めたり冷やしたりした空気。それをただ室外に放出してしまう。しかし、換気しなければ、部屋の空気は汚れ、不快で体にも悪い。「もったいないが、しかたがない」と窓を開けたり、ファンをまわしたり。

「もったいない」と思い悩み続けた4年間、換気ロス(損失)をなくす方法を考える日々が過ぎた。その結果、省エネ性と快適性を両立させる発明として青い実が誕生した。北陸育ちのねばりが一つの核を考えました。

もう30年前になる冬のこと。当時2才の娘が新聞の折り込みチラシを筒にまるめ両手で支えて息を吹き込み「ぬくい、ぬくい」という。私の脳裏に電撃が走った。まねしてみると確かに息のぬくもりが紙を通して手のひらに伝わってくる。和紙で熱交換器をつくってみよう。和紙ならば水分も通すだろう。厳寒の朝は窓ガラスの内側は結露するが、障子紙はぬれる事はない。だから和紙で熱交換器を作れば、温度と湿度の両方を交換できる、と考えました。説明すれば長いが一瞬のことでした。試行錯誤しながら手造りし、20cm位のサイコロ状の世界初の和紙製熱交換器が出来ました。損失(ロス)の無い(ナイ)ことから、『ロスナイ』と名付けました。昭和44年新春のことです。



手造りの和紙製熱交換器(ロスナイ)第1号

ロスナイは住宅用、業務用、設備用、列車用等に発展し数千億円の事業として、赤い実になりつつあります。最近では、新宿の新都庁舎、横浜ランドマークタワーなどに広く使われております。高気密・高断熱住宅にもロスナイが採用され、信州地方から多く普及されつつあります。

本物とは何か、或る人に云わせれば、快感・意外性・信憑性の三つをそなたのものとのことです。ロスナイはそんなものかなもしれない……。と勝手に思いつつ、更なる赤い実になることを願う毎日です。—三菱電機株式会社 吉野昌孝



福井は昔から酒のうまいところである。従って古くから、京都の伏見あたりから「新酒の仕込んだ樽」を買付けに来ていたし、多くの酒が関西に流れ、『灘の酒』としてブレンドされて一般に流通してきた。

酒米としては福井県内産の5百万石があり、水は白山山系の天然水が我々の足下を流れている。

そして福井県内には多くの地酒メーカーがあり、それぞれの蔵に住みついている酵母を使用して、お互いにその味を競ってきた。

究極の地酒 今秋蔵出し



福井酵母で仕込み着々



平成11年1月1日(金) 日刊県民福井 掲載

ところが数年前から、真の福井の地酒(日本酒)の誕生に向けた動きがあり、産官学の三者で開発を進めてきた【福井酵母】を使用した酒が今秋にも蔵出しされる予定です。

日本酒党にとっては待ち遠しく、楽しみな話であるが、すでに試作の段階が終わり昨年足羽山の茶屋にて開いたアンテナ居酒屋での評判も上々で、香り旨みの多い酒が飲めるようになる。

ところで小生は酒と友達になって40年近くになる。そのころ学生だった私は高い酒を飲めるはずもなく、地酒の2級酒を飲んでた。

若気の至りでただ量を飲むことに頑張っていた。最近戴き物の中に時折、大吟醸なるものがあった飲むこともあるが自前で購入して普段に飲むには値が張りすぎて、普段に飲む酒はどうしても普及品の日本酒ということになる。

ただあまり甘口な酒は口に合わない。やや辛口な酒はおいしいと思うし、こんど出来上がった酒が手頃な値段で一般の我々の口に入るのを楽しみにしている。今秋の秋に、この酒が出来上がったなら、「ワイワイ・ガヤガヤ」のメンバーと共に楽しみたいと思っている。—福井県建築事務所協会 神崎 貢



(石川高専5年、現 金沢大学工学部・山崎智恵子)